

【学会レビュー】

日本教育メディア学会

市川 昌

日本教育メディア学会は、日本視聴覚教育学会と日本放送教育学会が統合し結成された。日本の教育メディア研究を推進するための場としての全国学会も11年目を迎えた。第11回の大会は2004年10月16、17日に大阪府高槻市の関西大学総合情報学部を会場校として西日本を中心に全国から会員250人が参加して開催された。ちなみに前回の10回大会の会場校は江戸川大学で首都圏の大学の協力で盛大に行われた。今回はキーノート・スピーカーとして、中野照海（国際キリスト教大学名誉教授）、生田孝至（新潟大学教授）が20世紀の視聴覚教育史を踏まえたメディア教育の現代的課題を提起して、メディア教育の原点の確認から学会は始まった。今大会の特色として全員参加による映像教材の分析とフリーディスカッションによる「日本賞にみる放送と教育」が、コーディネーター水越敏行（関西大学）、小平さち子（NHK）、上田信行（同志社大学）によって、キャンパス全体を使って実施されたことである。日本賞をこれまでに受賞した世界各地の放送教育教材をビデオ再生して、全参加者が審査員の役割を担い、「より良い教育番組とは何か」について討論および採点するという模擬シミュレーションを通じて教材研究を重ねるという方法は、新鮮で通常学会にない参加意識の盛りあがりをみせたことで成功した。課題研究ではメディア研究における理論と実践の格差是正をはかる「メディアリテラシーの理論と実践の批判的検討」コーディネ

ーター小笠原喜康（日本大学）、確かな学力をめざすメディアの役割を模索する「学力とメディアの関係を問う」コーディネーター木原俊行（大阪市立大学）、情報通信技術の発展と自己学習能力を考える「e-ラーニングの可能性と限界」コーディネーター久保田賢一（関西大学）という多様な主題で、理論研究と実践調査などの報告が行われた。

自由研究部門には本学からは市川昌「公共財としての学習情報の知的所有権解釈—教育メディアとしての公正利用規定の導入」、佐々木正実、淵一憲「江戸川大学における教員と学生のメディア・コミュニケーションに関する調査研究」が発表し、それぞれ活発な質疑応答が行われた。現在の教育メディア研究の問題点は、歴史的な視聴覚教育理論と長い放送教育の実践を踏まえて、インターネット、マルチメディアなどのITテクノロジーの相互作用をいかに統合し、研究実践を深めるかにある。日本では基礎学力の低下とか、理数嫌いの風潮を改善し、メディア活用の面からいかに解決するか学会の課題は大きい。関西大学総合情報学部は立地条件としては高槻市からバスで30分の丘陵傾斜地にありやや不便であるが、広大な敷地に近代的な情報インフラストラクチャーとしてのコンピュータ・ネットワーク、マルチメディア編集スタジオなどを完備していて、学会運営も大学院生を中心に良くまとまっていた。次回の会場は東京学芸大学であり、研究者各位の参加を期待したい。